
MISSING YOU

地球の星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MISSING YOU

【Nコード】

N4532F

【作者名】

地球の星

【あらすじ】

聖司が中学を卒業後、イタリアに行ってから1年がたった。高校1年の雫は、最近聖司から連絡が来ないことを気にしながら過ごしていた。ある日、地球屋に行くと、西老人が聖司の近況について話してくれた。それを聞いて、彼女の心は……。 (旅／長過ぎる人生の道の中で／収録の同タイトル作品のノベライズです。)

中学を卒業してから1年後、1996年3月のある休日、高校2年生に進級を控えた月島雫と原田夕子の2人は、自分達の通っている高校の野球部の紅白戦を見にやってきた。

雫は特に試合を見たかったわけではなかったが、杉村目当ての夕子に誘われる形でやってきていた。

杉村は高校の野球部に入ってから、これまでベンチ入りはしたことはあるものの、公式戦にはまだ出場したことはなかった。

そのため、何とかこの紅白戦でアピールしようと気合を入れながら試合にのぞんでいた。

しかし後攻の白組にいる彼は、今日もベンチ入りはしたが、出番がないままだった。

試合は5対0で先攻の紅組がリードしたまま、8回裏になった。

先頭バッターが三振で倒れた後、監督は今日ここまでノーヒットの9番バッターに代えて、代打に杉村を送り込んできた。

勢いよくバットを振りながら左バッターボックスに向かう彼の後ろ姿を見て、夕子は表情を変え、「杉村ー！！」と、大きな声で叫んだ。

その声が届いたのだろう。彼は一瞬こちらを向き、軽くうなずくと、気合を入れながらバッターボックスに向かっていった。

すっかり杉村の応援モードに入っている夕子の隣で、雫は表情一つ変えずに試合を見ていた。

「夕子、周りのみんながこっち見てるよ。」

「えっ？」

夕子のはつとし、思わず顔を赤らめながら辺りを見回した。

「冗談よ、冗談。」

「んもう！！零ったら！」

零がからかってきたことに、夕子は思わず頭に血を上らせた。そのため、今度は違う意味で顔が赤くなった。

「それより、そろそろピッチャー投げるよ。」

「えっ？あ、うん。」

「ほらほら、杉村の応援は？」

「す…杉村ー！」

夕子はすっかり零のペースに巻き込まれながら、応援を始めた。

杉村は1球目からフルスイングをしていたが、緊張のせいか2回続けてストリートを空振りし、たちまち追い込まれてしまった。

一方のピッチャーは疲れてきてはいるものの、ここまで白組を一人で0点に押さえていることで、すっかり自分のペースで投げ続けている状況だった。

杉村は（このままではまずい。むざむざと三振なんか出来ない。）

と思うと、すかさず打席をはずし、

「ちよつとタイムお願いします。」

と、審判に告げた。

タイムがかかっている間、彼は背後で声援を送っている夕子を見ようともせずに、必死に自分と闘っていた。

（何とかして打ってやる。まだ1年とはいえ、紅白戦の控え要因なんかでいてたまるか！）

そう考えながら気持ちを立て直すと、再びバッターボックスに戻った。

3球目は高めのつり球を見逃し、4球目は低めに落ちるカーブをファールにした。

杉村は鬼のような形相をしながら一切の雑念を振り払い、完全に勝負の世界に入り込んでいた。もはや夕子の声も、全く耳には届いていなかった。

5球目、6球目は低めのボール球を見逃し、これでカウントは2

3 になった。

5点をリードされている白組のレギュラー陣にはあきらめムードが漂う中、杉村はこの1打席にかけようと必死だった。

その後、彼は7球目から4球連続で、ストレートをファールにして粘った。

まわりの人達は、雫と夕子を含めて誰もがその手に汗握る展開に釘付けになっていた。

次はとうとう11球目となった。

ここまでテンポ良く投げてきた相手ピッチャーは、その粘りに押されたのだろうか、段々肩で息をするようになってきた。

いつまでこんな勝負が続くのだろうか。

もしかしたらずっとファールで粘り続けるかもしれない。この勝負を終わらせるには、ボールを投げて歩かせるしかないかもしれない。

ピッチャーは心の中でそう考えていた。

その頃、夕子はいつの間にか声を出すのをやめ、両手を合わせながら「お願い、打って!」と言いたげな格好をしていた。

そして11球目、ピッチャーは早く三振しろと言わんばかりに、こん身のストレートを投げてきた。

杉村はそれにフルスイングで応えた。

ガキン!

打球はライト方向に飛んでいった。ライトは懸命に打球を追っていった。

「入れ!入ってくれええ!!」

杉村は走りながら思わず叫んだ。

打球はぐんぐん伸び、ジャンプしたライトのグラブのわずかに上を通過してフェンスを越えていった。

「入った…。入ったー!!!」

夕子は思わず立ち上がり、ぎゅっと合わせていた両手を上に突き上げて大喜びをはじめた。

雫も「すごい！！」と言いながら一緒に喜んでいた。

緊張感から解放された杉村は左手を突き上げ、雄叫びを上げながらダイヤモンドを1周して、夕子を見ながらホームインした。

一方で、ホームランを打たれたピッチャーは、まだ4点のリードがあるにもかかわらず、あまりにも嫌な形で一発を浴びたことに憤慨していた。

その様子を見て、紅組の監督がグラウンドに姿を現した。そして審判にピッチャー交代を告げた。

その後、白組はリリーフピッチャーの前に押さえられ、この回は1点止まりだった。

9回表、杉村は活躍が認められ、ベンチからの指示で、ファーストの守備についた。

それを見て、夕子は再び声援を送った。

杉村はさつきまでは勝負にのめり込んでいたために、夕子を全く無視していたが、今度は彼女の方を向き、左手を振り上げて応えた。試合はその後両チームとも無得点のまま進み、結局5対1で紅組が勝った。

選手達が集まって礼をした後、杉村は喜ぶ紅組の選手達を見ながら、さわやかな表情を浮かべていた。

試合終了後、雫と夕子は自転車を取りに、学校の自転車置き場まで来た。

「夕子は杉村と一緒に帰らないの？」

「ううん。さつき杉村のところに行ったら、『負けたチームには、全員特打ちと、グラウンド20周のランニングが待っているから、今日は遅くなる。』って言っていたの。今頃は息を切らしながら走り続けていると思うわ。」

「ふうん、そうなんだ。夕子って最近杉村と一緒に帰ってないでしょ？」

「うん…。」

「つれない彼氏だよね。本当に野球バカだし。野球しか見えてないのかしら。」

「でも気持ちは分かるわ。今はレギュラーの座をつかもうと必死だから。その分私は会える時間が少ないけれど、我慢しなきゃ。」

「そう…。大変かもしれないけれど、夕子も頑張ってるね。」

「そうね。そういえば、天沢君から最近手紙とか来た？」

「…。」

雫はそれを聞いて動揺してしまい、うつむきながら首を横に振った。

「あ、ごめん、気にしていることだね。」

「…うん…。でも、自分で選んだことだから。」

以前より会う機会が少ないとはいえ、杉村は夕子と同じ高校に通っていた。

しかし、その一方で聖司はイタリアに行ってしまう、あれから雫とはずっと遠くに離れたままだった。

果たして雫はどのくらい辛い現実に耐え続けているのだろうか…。

夕子にとっては、その壁の大きさが果たしてどれくらいものなのか想像も出来なかったが、せめて自分が杉村と良好な関係が続けることで、少しでも雫の励みになりたいと考えていた。

夕子と別れた雫は家には向かわず、西老人のいる地球屋に自転車で向かっていった。

地球屋に到着すると、雫はドアをノックした。

すると、中から「雫さんかね？」という声が聞こえてきた。西老人の声だった。

「はい。月島雫です。入ってもいいですか？」

「もちろんだとも。さあ、入りなさい。」

「では、おじやまします。」

雫は中に入ると、机に腰掛けた。

西老人はお茶を入れて、雫に差し出してきた。

「これ、おいしいですね。」

「そうか、よかった。」

2人は出されたお茶のことではばらくの間、会話を続けていた。
「ところで、雫さんは新しい小説の執筆はどうかね？順調に進んでいるか？」

「はい。まだまだ完成は先になりますけれど、受験生だった頃と比べれば、いい形に仕上がってきていると思います。きっと私の成長ぶりを感じ取っていただけたと思います。」

「そうか、楽しみに待っていますよ。」

「あの…、ところで…。」

さっきまで明るかった雫の表情が曇った。

「何かね？」

「聖司は…、聖司はどうしていますか？連絡とか、ありましたか？実は最近、なかなか返事がないんです。私が3回続けて手紙を出したつきり…。」

表情がますます曇った。

「そうか。」

「あの、おじいさんには連絡をしているんでしょうか？」

「僕も最近音沙汰なしだったから心配していたんだが、昨日の夜、久しぶりに電話がかかってきてな。」

「えっ？かかってきたんですか？」

「ああ、そうだが。」

「あの、聖司、何て言っていましたか？元気に過ごしているって言うてましたか？」

雫は何かにすぎるようにして問いかけた。

「さすがに悩んでいるような感じはあったな。」

「悩んでいるって？」

「うむ…。」

西老人は、昨夜の電話でのやり取りについて詳しく話し始めた。

『聖司、どうしたんだね？そんなに思いつめて。』

『作れないんだよ！バイオリンが！どうすれば自分の納得出来るものが作れるのか分からないんだ！先生からも色々言われたし！』

『そんなに興奮することもなかるう。ところで雫さんには連絡をしているのか？』

『してないよ。こんな状況で出来るわけないだろ！雫にみつともない姿をさらけ出せるか！おれは、一人前のバイオリン職人になるって雫と約束したんだ！こんなところでトラブっている場合じゃないんだよ！』

『変なプライドは捨てなさい。そんな意地を張っていては、いつまでたっても一人前にはなれんぞ。』

『じゃあ、どうしろってんだよ！』

西老人は聖司が言っていたことを包み隠さずに話した。

それを聞いて雫は動揺を隠せなかった。

『聖司は、そんな理由で私と連絡を取ろうとしなかったんですか？』

『多分そうだろう。あいつの性格だったら言い出しかねんことだ。』

『そんな…。』

雫はますます動揺して、椅子に座ったままうつむいてしまった。

その様子を西老人は見逃さなかった。

『すまなかつたな。雫さんには辛いことだったかもしれない。』

『いえ、聖司の近況を聞けただけでもよかったです。』

『そうか。』

それから2人は聖司の話題からは離れ、別のことを色々話し合っていた。

そうしているうちに日はゆっくりと西に傾いてきた。そろそろ帰る時間だ。

『おじいさん、色々ありがとうございました。』

『なあに、困ったことがあったらいつでも来なさい。』

「はい、分かりました。」

雫は深く頭を下げると振り返り、自転車で家へと向かっていった。

その途中、雫は信号待ちをしていると、西の空で雲のすき間から真っ赤に燃えている夕日が目に入った。

それは去年の3月に、聖司がイタリアに旅立ってしまう前日に見た光景とそっくりだった。

真っ赤な夕日、街の建物、まだ芽吹いていない街路樹。全てがあの時のままだった。

しかし、唯一つだけあの時と違うものがあつた。

聖司がいるかないかだった。

雫は、ふと1年前のあの時のことを思い出した。

『雫、もうすぐ信号が青になるよ。自転車に乗って。』

『うん。』

聖司に言われて、雫は椅子に座るようにして、荷台に乗った。

『さあ、今から飛ばすからな。しっかりつかまってるよ!』

『うん。気をつけてね。』

雫はそう応えると、両手を伸ばし、背後から聖司をしっかりと抱え込んだ。

そのぬくもりを感じた聖司は思わずドキツとして顔を赤らめた。

そのせいで一瞬まわりが見えなくなってしまったが、次の瞬間には我に戻った。そしてペダルに思いっきり力をかけ、横断歩道を渡り始めた。

（このまま時間が止まってくれたらいいのにな…。）
走っている間、彼女はずっとそう考えていた。

あの時感じたぬくもりを、雫は今も覚えていた。
だけど、今はもうその人はいなかった。

雫が込み上げる寂しさを抑えながら、夕日を見つめていると、信

号は青になった。

次の瞬間、まわりの人々は一斉に進み始めた。

それにつられるようにして、雫は自転車にまたがり、前に進み始めた。

家に帰ってから、雫は真っ先に自分の部屋に行き、早速ラジカセの電源を入れ、カセットテープに収録されている曲を聞き始めた。

この曲は去年、聖司がイタリアに行く前に録音したもので、聖司や西老人ら4人が演奏して、雫が歌っていた。

聞こえてくるメロディーの中で、バイオリンの音が、曲を一層印象的なものにしていった。

聖司がいた頃は、これらの曲を聞いていて楽しかった。

しかし、今では聞いていると寂しさが込み上げてきた。

「聖司も…この曲を聞いているのかな？そして、私のことを思ってくれているのかな…？」

雫は曲が終わるとテープを巻き戻し、また聞き始めた。

そうしているうちに、狂おしくなるぐらいに聖司のことを考え始めた。

聖司…、いくら物事がうまくいかないからって、意地なんか張らなくてもいいじゃない。

私は一人前のバイオリン作りになった聖司だけが好きなわけじゃない。

一人前でなくてもいい。夢に手が届かなくてもいい。

泣いている聖司でもいい。悔しがっている聖司でもいい。

怒っている聖司でもいい。みつともない聖司でもいい。

私はただ逢いたい…。それだけでいいの。

逢いたいよ…。聖司…。

お願い…。会いにきて…。

雫の目からはとうとう涙が溢れ出してきた。

一旦泣き出すと、次から次へと涙が溢れ出し、止まらなくなった。やがて、表情はクシャクシャになり、ついには号泣してしまった。「聖司！聖司のバカ！！何で私にこんな辛いおもいさせるのよ！！何で途方もない夢なんか描いたのよ！！私が今どんな気持ちなのか分かってるの？聖司のバカ！バカバカバカ！！！」

彼女がこんなに泣いてしまうのは、あの時以来だった。

1年前のあの日…。

その日は、聖司がいよいよイタリアへと旅立ってしまう日だった。空港での見送りには、聖司の家族をはじめ、雫、夕子、杉村が来た。

「聖司、父さんはまだお前を認めたわけではないが、自分で決めた道だ。絶対に夢をかなえて来い！約束だぞ！」

「お母さん達は、お前が高校に進学してくれることを諦めたわけではないけれど、夢を大事にしながら頑張りたいね。」

「はい、分かりました。頑張ってきます。心配しないで下さい。」

聖司は胸を張りながら答えた。

「聖司、何かあったらいつでも連絡してきなさい。向こうの先生にも失礼のないようにな。」

「天沢君、成長した姿を楽しみにしているからね。ファイト！」

「おれは…、なかなかいい言葉が浮かばないけれど…、とにかく頑張れよ！」

西老人、夕子、杉村も続いた。

聖司は彼らにも一言ずつ言葉を返した後、雫を見た。しかし、さつきまで明るかった彼女は、今はうつむいていて、暗い表情に見て取れた。

「おい、雫、どうしたんだよ。おれに何か言うことないのか？」

良く見ると、彼女の手は震えていた。

「雫、お前もしかして泣いてるのか？」

聖司は身をかがめて表情を見ようとした。

その時、黙ったままだった雫が震えるような声でしゃべり始めた。

『聖司…、本当に行ってしまうの…？』

『ああ。今さら何言ってるんだよ。』

『もっ…、会えなくなるの…？』

『当たり前だろ。』

『聖司の…バカ…。』

『えっ？』

『聖司のバカ。バカ！バカ！バカバカバカ！何で私を一人にするのよ！何でイタリアになんか行ってしまうのよ！聖司——！』

雫は泣き叫びながら言い放つと聖司の胸元に勢い良く飛び込んできた。

『うわっ！ちよ、ちよっと！』

人前で突然抱きつかれてしまい、聖司は対処に困ってしまった。

『私を一人にしないでよおおおおっ！！』

雫は聖司の体を力いっぱい抱きしめたまま、号泣し続けていた。

『ごめん…。ごめんな、雫。おれのせいでこんな辛い目にあわせて、ごめんな、ごめんな！』

やがて聖司の目にも涙があふれてきた。

2人は案内板に“Final Call”の表示が出るまで、そのままそばに寄り添い続けていた。

雫は聖司の姿が見えなくなつた後も泣き続けていた。

『ちよっとあんたねえ、いくら何でも悲しみすぎよ！』

『じいさん、何とかしてくれよ。月島が死にそうだ！』

夕子と杉村からそう言われてもまだ立ち直れない彼女は、2人に抱えられながらやつとの思いで空港を後にしていった。

あれからどれくらい時間がたったのだろう…。まだ泣いている彼女は窓を開け、身を乗り出した。

空にはたくさんの星が姿を現していた。

雫は時間を忘れて星空に見入っていた。

そしてふと、いつか理科の時間に習ったことを思い出した。

「考えてみたらこの地球という星と、あの星までの距離って何十光年、何百光年もあるのよね。キロメートルに直すと、何百兆キロも、何千兆キロも……」

もしもあの星に向かって電話をかけたとしたら、返事がかえってくるまで何十年も、何百年もかかってしまう。

でも、日本からイタリアに電話をかけた場合は、自分の声が一瞬で相手に届く。

実際に電話をかければ、相当な電話代になってしまったために、親からは1回につき3分以内。月に3回以内と決められていた。

そのため、今はかけたくても受話器に手を伸ばすことは出来なかった。

しかし、星までの距離と比べれば、聖司は決して遠くにいるわけじゃない。

いつの間にか泣き止んでいた雫は、そう考えながら机に戻ると、引き出しから自分がこれまで書きためておいた詞が入っているファイルを取り出した。

そして、今の自分の気持ちを一番象徴している作品を取り出して、じっと眺めていた。

タイトル：逢いたいよ…

誰かと笑っているのなら 明るいままでいられた
離れていったあの人を 忘れることが出来た
でも一旦思い出したら 涙あふれて止まらない
どうして苦しめるの？ どうしてなの？

逢いたいよ… 自分ひとりを置いたまま
見知らぬ世界を目指した人に
嫌いになどなるわけがないけれど
今はあなたが許せないよ
夢と愛は 一緒になれないの？

今も脳裏で響いてる あなたが残した言葉
「君が僕をあきらめても 君を思い続ける」と
朝の度に思い出すよ 嘘でないことを信じて
この目を見つめてた その瞳も

逢いたいよ… 今はそれしか浮かばない
神様 いるなら願いを聞いて
嫌いになどなるわけがないけれど
今はあなたが許せないよ
夢と愛は 一緒になれないの？

あなたも思っているよね
私以上に私のことを

逢いたいよ… わがままだけどこの気持ち
手紙に託して送ってみます
今でも好きでいてくれるのなら
読んだらきつと返事をして
夢より自分を 今だけは選んで

逢いたいよ… 今はそれしか浮かばない…

この作品を最後まで読み通した雫は、ふと最後に書いていた部分を見て、これを早速実践してみようことを思いついた。

「聖司、明日この作品を送るからね。もし読んでくれたら、この詞に曲をつけて、カセットに吹き込んで送り返して。たとえば直接会えなくてもいい。曲を通じて聖司を感じられるのなら、私はそれでいい。」

雫はそう言いながら自分を奮い立たせると、早速ルーズリーフの紙と鉛筆を取り出し、その作品を書き写し始めた。

聖司はきつと、返事を送り返してくれる。

そして、きつと私に会いにきてくれる。

書いている間、彼女はひたすらそう願っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4532f/>

MISSING YOU

2010年10月8日13時43分発行